グレアム・グリーンの「地下室」について

On 'The Basement Room' by Graham Greene

岩　崎　正　也
Masaya Iwasaki

1

1935年に発表された「地下室」('The Basement Room') は、同年のリベリア旅行の帰途、「航海の倦怠感から逃れるために貨物船上で構想を得て[1]」制作された短篇である。グウェン・ボードマン (Gwenn R. Boardman) が、「『地下室』に含まれるアフリカに関する記事の意味は、『地図のない旅』(*Journey Without Maps,* 1936) によってそれを解く鍵が与えられていないとすれば、明白にならないだろう[2]」と言うように、「地下室」が『地図のない旅』のもつ、空間的移行に時間的遡行を重ねることによって、人類の原始と個人の幼年時代を探るという二重のテーマと構造を共有すると考えることができれば、フィリップ少年とベインズとの融合、離反の関係を理解することは容易になるだろう。

物語の中でベインズは未開に対立する文明の秩序の擁護者であると考えられる。ロンドンのベルグレイヴィアの大邸宅にあって、午前11時半にジンジャービアを1杯飲み干したあと、チョップを食べる習慣を信奉するというふうに、以前シエラレオネの沿岸植民地で暮らしていたときの白人の権威を引きずっているからである。

> 彼は何かをなくして残念がっているように、ジンジャービアをぐっと飲んだ。[3]

またベインズは同時に、緑のラシャ張りのドアによって隔てられた2階の子ども部屋によって表される「原始」の体系の守護者でもある。彼はその世界の住人であるフィリップにたいして子守唄の代わりに沿岸植民地にいた頃の羽振りのよい暮らし向きを黒人の「文明」度の低さを素材にしたお伽噺にして聞かせるのである。

少年がエミーの秘密を洩らすことによってベインズを無意識に裏切ったのは、ベインズのもつ、「原始」社会の主宰者としての役割と「文明」人としての存在との間に亀裂を見出したからである。そしてベインズとの接触をみずから断ち切ったために「原始」の世界から閉め出されて「死」に向かう。

ここでグリーンによって提出された「生」と「死」の関係を未開社会のイニシエーションに見られる「死」という存在の位相から促えてみることも、フィリップ少年を原型として無限に再生される幼年の死を理解する有効な方法となるだろう。

2

『地図のない旅』は、少年期に『ソロモン王の洞窟』(*King Solomon's Mines,* 1885) によってアフリカ熱を掻きたてられたグリーンが、シエラレオネの沿岸植民地にある白人の頽廃的な「文明」体系の地域を経由してリベリアの奥地の「原始」秩序の地域を通過することによって生への希望を呼び醒される旅行記である。

金持ちグリーン家のいとこのバーバラ・グリーンは23歳のとき、リベリアに行かないかというグレアムの冗談をシャンペンを飲んだ勢いにつられて承諾し、約40日にわたる原始の世界へ旅立つ。彼女は後に旅行記を著し、グリーンについて次のように語る。

> 彼はどういうものか上の空であったり、実務

に向いていないように見えたが、後になってみると彼の能率的な点と、どんな細かいことにも心を注ぐ点にびっくりした。本当にお気に入りの三、四人を除くと、他の人たちは彼にとっては、科学者が標本を検査するように冷静に落ち着いて検査したいと思っている昆虫の群れに似ているのではないかと感じた。彼はいつも丁寧だったし、相当にユーモアの感覚があるが、厳粛すぎて人から笑われるような面はほとんどなかった。[4]

一方、グリーンは『脱出路』(*Ways of Escape*, 1980) の中で、「23歳の女性であるいとこのバーバラをこの冒険の巻き添えにすることは少なくとも軽率だった[5]」が、旅行中彼女が、道中の判断をすべてグリーンに任せ、けっして批判をしない点で適切な同伴者だったと言う。

1935年当時のシオラレオネは、沿岸地方がイギリスの直轄植民地、内陸部が保護領であり、またリベリアはすでに憲法をもつ共和国である。

グリーンは旅行中、シエラレオネとリベリアの沿岸地域の「文明」の秩序が届かない奥地に、まったく独自の「原始」の秩序があることを知る。

(1) フリータウンではヨーロッパ風の商店、教会、官庁、2軒のホテルが醜悪なのにたいし、「原始」の秩序に基づく美は「果物売りの小さな露店」や「日曜日の朝、堂々と教会から家に戻る原住民の女たち[6]」である。また制服を着たクリオール人は白人の代役にすぎず、白人から見ると滑稽な存在だ。[7]

(2) 女の美については白人「文明」の基準による「小さな丸い未熟のヨーロッパ風の乳房」よりも「平らなブロンズのたたまりをなして垂れ下がっている乳房[8]」の方が美しく感じられる。

(3) シエラレオネの白人「文明」の光が当たらない保護領の地域では、「たいがい原住民の知っている事の方が重要になる」のはたとえば「医者ででもなければ蛇に咬まれた傷を彼らほどうまく治療できる可能性は少ない[9]」からである。

(4) 海岸から50マイル以上の奥地では「文明」は停止する。[10]

(5) 「文明」は「シエラレオネに関する限り、ペンデンブーまでの鉄道であり、ヤシの実の輸出増であった[11]」。

(6) 奥地では時間は計測不能になり、時間のない世界が現れる。「文明」の利器である時計も「原始」の気候には勝てないからである。[12]

(7) 奥地では、ヴィクトリア女王の銀貨は女王の死とともに価値を失う。[13]

(8) 先を急がず、「自分をアフリカといっしょに漂流させる」ようになった。[14]

(9) 彼らは子どもに優しく、隣人同士に礼儀正しく、一つの礼儀の規準を守っている。[15]

(10) 警察のない国を一財産の銀貨をもって無事に通過できたことにグリーンは驚く。[16] そういう黒人を沿岸地域の白人は信用していない。[17]

(11) どの村に行っても原住民が山のようなグリーン一行の日用品を見に好奇心をまる出しにして集まって来たが、「どんな些細な窃盗でさえ1回も起こらなかった[18]」。

(12) 「リベリア共和国の奥地の伝道団体は政治にも商業にも何の接触ももたない点が独特である[19]」。

(13) ブーズィー地域の原住民は、シエラレオネの「イギリス化した教育のある[20]」黒人に比べ尊厳を感じさせる態度で歩く。

(14) この地域では「畑で働くときの男の持つ農具でさえ[21]」沿岸地域のトタン小屋に比べ旧い文明を持っている。

(15) 「大統領が検査のために拡げているブーズィーの布地ほど美しいものを見たことはなかった[22]」。それは「文明」社会の伝統とは異なる文化の体系から出現したものだからである。

(16) ガライエを出てからは、時間の経過については、1日単位どころか、週、月の単位でも計測不能であることを思い知らされる[23]」。

「文明」の秩序と「原始」体系との最大の相違は、「文明」社会にある計測可能な時間も空間も「原始」社会には存在しないという点であり、「原始」の体系の根幹は停止した時間と地図のない空間の存在にある。

幼年の喪失から成熟に至る人類に共通の原始的体験の原型は、近代社会がすでに失っている原始社会のイニシエーションの中に見ることができる。

ミルチャ・エリアーデ (Mircea Eliade) によれ

ば、未開社会では、子どもが成人に転化するための厳しい過渡儀礼を部族の全少年に義務づけているという。儀礼は神話的時間の中で行われ、修練者は厳しい試練を通過することによって幼年の「死」から聖なる「再生」に達する。なぜなら、儀礼は、超自然者が主宰する万物の創造、生成、滅亡という存在様式を模倣するからである。[24]

たとえば、オーストラリアのある部族では、子どもはその母親や周囲のすべての女たちから引き離されて聖所に隔離され、部族に伝わる宗教的伝承を教えられるとともに、新たな存在の位相へ移行するために身体にある種の手術を施される。[25] 幼年の生＝俗と再生＝聖とは非連続の存在だから、その境界を通過することは「死」の体験を意味する。したがって子どもにとっては、星や月明かりのある闇ではない神秘的な暗黒と神々の接近という「死」の体験は恐怖の事件である。[26]

また、ガボンのバッキンバ族の儀礼の場合、子どもは試練の最中に体験したことを他人に話さないことを誓う。その秘密を洩らしたときは殺されるという。[27]

「原始」の支配するリベリアの奥地で、グリーンは当然のことながら部族の過渡儀礼を見聞し、その事例について記している。

原住民の子どもは村を離れて森の学校に2年間入学する。無事にこの「死」を通過することができた子どもは、体にいれずみを施されて再生に達する。子どもの2年間の「死」を主宰する森の学校の校長＝仮面をつけた悪魔は子どもにとって恐怖の絶対者である。

旅の途中でグリーンが雇ったポーターのマーク少年によると、ある日ミッション・スクールにいるとき、突然やってきた「悪魔」によって手足を縛られ目隠しをされて、森の学校へ連れられ、そこで首、腋の下と腹に小さなすじをつけられ、2週間後に村へ帰されたが、その間したのは坐って米を食べるだけだったという。

3

「地下室」はフィリップ少年が生を発見するところから始まって、死を体験するところで終り、「庭の下」('Under the Garden' 1963) はワイルディッチが死を通過して再生に向かうところで終る。生と死、死と再生の領域を分ける鍵は、ラシャ張りのドアの持つ両義性にあると考えられる。そのドアを挟んで子ども部屋と大人の部屋、原始と文明の二種の世界が対峙し、少年がドアを通して生と死の間を往復するからである。

> フィリップ・レインは下へ降り、ラシャ張りのドアを押して、食器室をのぞいたけれども、ベインズはいなかった。生れて始めて地下室へ行く階段に足をかけると、またもこれが人生なのだという感じがした。[28]

境界としてのラシャ張りのドアの原型は、グリーンが6歳のときに一家が移り住んだバーカムステッド・パブリック・スクールの校長公舎の中にあり、私邸と校舎を隔てている。それについてマイケル・トレーシー (Michael Tracey) は次のように記している。

> 校長公舎自体は2つの区画に分かれていた。私邸側ではヒューやその兄弟姉妹が両親と暮らしていて、両親の愛情がどちらかといえば遠まわしで、ときどきサディスティックになる女中がいたにもかかわらず、少しは満足を味わうことができた。1階のチャールズ・グリーンの書斎を越えて、狭くて天井が低く暗い石の廊下の端にある緑のラシャ張りのドアは両方の世界を隔てる国境地帯であった。ヒューはドアの私邸側にいるときはほぼ安心していられたが、そこを通過するといつも、その気分がすり抜けて嫌悪を感じたり、憂鬱になったりした。[29]

この文章の中の「ヒュー」を6歳年上の「グレアム」に置き換えれば、そのまま校長校舎の中にはグリーンの幼年を彩る生と死の世界が現れる。グリーンはドアの国境上に佇むときの宙ぶらりんの意識を『掟なき道』(*The Lawless Roads,* 1939) の中で次のように語る。

> 父の書斎の脇の通路にある緑のラシャ張りのドアを押しあけると、紛らわしいほどよく似て

いるもう1つの通路に出るのだが、そうはいうものの異国の土地にいるのだ。寮母の部屋からはヨードの匂いがいつもしていて、更衣室からは蒸しタオルの匂いが、またそこら中からインクの匂いがしていた。再びドアを背にして閉めると、世界は書物、果物とオーデコロンの違った匂いがした。

私は2つの国の住人であった。土曜と日曜の午後にはラシャ張りのドアの一方の側の住人になり、平日はもう片方の住人になる。境界線にいてどうしてそわそわしないでいられるだろうか。[30]

上記の文は35歳のときに表した13歳のグリーン自身の心象風景である。グリーンは13歳のときにセント・ジョン寮に入って以来、校長公舎内のラシャ張りのドアを通過して、寮生活に不潔と残酷さという悪を認識することによって永年にわたる死の中を潜行し、22歳のときのカトリックへの改宗を経て、31歳のときにリベリア旅行中生への希望を確信するという再生に達する。その20年近くにわたる生ー死ー再生の時間と体験を重ね合わせたのが、『掟なき道』の「地獄の存在を信じたから、天国の存在を信じるようになった[31]」という告白である。

この逆説的な信仰告白の前段「地獄の存在を信じた」に見られる恐怖と絶望に充たされた死の領域に滞在する作者がパブリック・スクール在学中にその悪の認識のモチーフを詩に表したのが「賭博師」('The Gamesters,' 1923) である。マリー＝フランソワーズ・アランとの対談集『もう一人の男』(*The Other Man,* 1983) によれば、「『パブリック・スクール詩選』(*Anthology of Public Schools Verse*) の中に掲載された別の物語の中で私は（またしても）神に悪魔と不確定な結末をもつチェスのゲームをさせてみた[32]」と語っているが、これはグリーンの記憶違いで悪魔が神にたいしてカード・ゲームの「戦争」を挑む作品である。

賭　博　師[33]

地球は広大な宇宙の海にある昼と夜に彩られた
1つの瘤に過ぎなかった。
そのあたり一面に星たちが
興奮におののいて、群がってじっと見つめていた
そして上の方では神と悪魔が札をはっていた‥‥
悪魔が嘲笑して言う、
「この新しいおまえの地球の運命をおれに賭けてくれ。
もしおまえが勝てば、おれは戦争から手を引こう。
もしおれが勝ったら、この何百万もの星をおれの玩具にさせてくれ、好なきように考え、振舞わせてくれ」
すると神は果てしない退屈な戦いに疲れきっていたので、
答えた、「そうしよう」
両者はトランプをはった。
あらゆる星たちがびっしりと近寄って見とれていた。
両者はあと1枚だけ札を残して12組の札を取っていた。
悪魔の顔にゆっくりと
勝ち誇った希望と確かな勝利に充ちた意地悪い笑いが浮んだ。
冷たい身震いがすべての星たちを通り抜けた。
悪魔はキングの札を出した、すると神は・・・結末はわからない。

THE GAMESTERS[34]

By H. Graham Greene, Berkhamsted School

THE earth was but one knob of coloured light
In the vast sea of space. All round the stars
In dread excitement clustered, watching close,
And up above God and the Devil played. . . .
Quoth Satan, laughing in his mockery,
" Stake me the fate of this new earth of thine.
If thou dost win, I will desist from war,
If I, then let these millions be my sport,
Thinking and doing only at my will."
And God, tired out with endless, dreary war,
Replied, " Thus let it be."
They played at cards,
And all the stars crept close and gaped to see ;
Each gained twelve tricks with but one card to play.
Slowly o'er Satan's face there spread a leer
Of hope triumphant, certain victory,
And a cold shudder passed through all the stars.
The Devil played a king, and God . . .
Who knows ?

「当時カトリック教徒でもなければ、信者でもなかった[35]」グリーンの関心は「戦争」ゲームの勝負にあるのではなく、「外国人であり、容疑者であり、怪しい共犯者のいることがわかっている文字通りの追われる者であった国[36]」に充満する強大な悪の実在を、カード・ゲームに勝ち誇った笑いを見せる悪魔の表情として表すことにあったと考えられる。「戦争」は単純な家庭的なゲームであるため、現実にプロの賭博師が利用することはないだろうが、「賭博師」は成人したグリーンの回想を通さずに、少年の感性を通して現実の悪をどう捉えたかということを示す要素として採りあげる価値をもつだろう。

4

リベリアの沿岸植民地の出身であるベインズの行動にはグリーンがリベリア旅行中に観察した「文明」地域の日常生活が再現されている。往路の船旅でセネガルのダカールに寄港したとき、「中年の船会社代理店の男は食事が始まるたびに、沿岸地域では食事のことをチョップというんです[37]」と乗客に教える。またそこの船着場ではセネガル人の男たちが2人ずつ互いに手をつないだり、相手の首に腕をまわしたりして、親愛の気持ちを表している。しかしグリーンにとって「それは愛ではなかった。私たちに理解することのできる何事をも表していなかった[38]」と感じられた。

「地下室」の始まりで、ベインズがフィリップに向かってチョップと40人の黒人の話をするときに、ベインズもフィリップの父もともにアフリカのイギリス植民地で事業を企てるコースター(Coaster)であり、ベインズがドアの向うにある「文明」秩序の支配者であることが示される。同時にグリーンによるフリータウンの腐敗とモンロビアの原初の対比を考えることによって、フィリップの両親が休暇に出かけたあとベルグレイヴィアの大邸宅にあって2週間だけの支配者となったベインズの「文明」の秩序も終りを告げようとしていることが暗示される。

フロイトが言うように、夢の作業が人を二重の太古の時代、つまり個体の幼年時代と人類の原始の時代に連れ戻すという点で、グリーンは7歳になってから、子ども部屋への階段の上がり口のところで魔女に襲われる夢によって西アフリカの「原始」へ牽き寄せられたのだ。「スイスに優先して西アフリカを選んだのは完全な意識的な精神によるものではない[39]」からである。

ベインズとエミーとフィリップの3人の会食のことを知ったあと、夜半に子ども部屋のフィリップのところへやって来た「グレーの髪をふり乱し、黒い服のボタンをのど元のところでとめ、黒い手袋をした[40]」ベインズ夫人は「夢の中の魔女そのまま」だった。この点、ベインズ夫人はフロイトを通してアフリカ奥地の森の学校を主宰する「悪魔」の小説的再現であり、同時に、『ソロモン王の洞窟』のガグールの再生であるということができる。一方、ドアのこちら側の子ども部屋はアフリカの「原始」の秩序に支配されている。

フィリップはエミーに次のように2回出会っている。

(1) 少年は町に出て、喫茶店の中にベインズと愛人のエミーがいるのを見る。しかし姪として紹介される。

(2) ベインズ夫人が外泊しているときに、少年はベインズとともに楽しい1日を過す。ハイド・パーク、「コーナー・ハウス」での昼食、動物園。夕食は3人で食べる。

ベインズによって前記の2つを秘密として守るように約束させられることによって、男女の性をもたないフィリップは成人に向かうためのイニシエーションの試練の中に突然拉致されるのだ。エミーの出現とともにベルグレイヴィアの邸宅はアフリカの非日常の「森の学校」に転化し、ベインズは仮面をつけた超自然者を演じ、両親不在の2週間は過渡儀礼の聖なる時間として経過する。

フィリップはその秘密を洩らしてベインズを無意識に裏切ることによって、イニシエーションのタブーを犯したために再生に失敗する。エミーの存在の秘密——この心象風景はじきに少年の記憶から忘れられてしまうが、その無意識の中に永遠に留まることになる。フロイトに従えば、幼児期の重要な事柄は凝縮、移動を通じて隠蔽記憶として存在するからである。この記憶は60年後の死の床にあるときに無意識の中から蘇り、フィリップ

は「あの女はだれだね[41]」とかたわらの秘書に尋ねる。

「原始」に属する少年と超自然者を演ずる「文明」人のベインズとの関係が崩れてしまったあと、両者は人生に怯えた7歳の少年と「犬のように無言で嘆願」する男に転化し、「森の学校」はベルグレイヴィアの邸宅に変る。しかし邸内の世界はもとの「文明」人のベインズと「原始」人フィリップとの関係が破壊された廃墟である。

こうしてフィリップが秘密を洩らすことにより、ベインズのもつ超自然者の役割が剥ぎ取られるときに、超自然者によって支配されていたフィリップの属する「原始」世界が消滅する。幼年の世界から閉め出されたフィリップは「ラシャ張りのドア」の国境に立ちすくむ。

> 国境の最後の駐屯地から信号が明滅し、懇願し歎願し、記憶を引き出そうとした。[42]

このようにして13歳のグリーンが寮と家庭の両方から逃避して潜む「国境」としてのクロッケーの芝地の原型である校長公舎内のラシャ張りのドアが「原始」社会の過渡儀礼にある生と再生を遮断する「死」に重なる。それはグリーンが言うように、森の学校が「イギリスのパブリック・スクールのように幼年期と成年期の間に気味悪く存在する[43]」からである。そして「死」のイメージを孕んだ校長公舎のラシャ張りのドアはベルグレイヴィアの邸内のラシャ張りのドアとして、また「橋の向う側」('Across the Bridge,' 1938) のキャロウェイ氏が佇むアメリカとメキシコの国境として、無限に再現される。

> このバーカムステッドに形状が無限に再生されることになる原型があった。[44]

この「バーカムステッド」を「ラシャ張りのドア」に置き換えれば、ユングの「魂こそが意識の母胎であり、主体であり、意識の成立を可能にするものである[45]」という世界が現れる。

5

国境としての緑のラシャ張りのドアによって示される生と死の係わり合いの重層的な意味は、「ある型のモチーフがさまざまの民話や伝説の中にほぼ同一の様式で再生される[46]」というユングに従えば、神話の類型を持ち出すことによって一層明らかにされるだろう。

旧約聖書の創世紀によれば、

> エホバ神其人に命じて言たまひけるは園の各種の樹の果は汝意のままに食ふことを得　然ど善悪を知る樹は汝その果を食ふべからず汝之を食ふ日には必ず死べければなり（2章16－17）

楽園の創造の中のこの1節は、生と死の係わりあいを考える上でたいへん暗示的である。これによれば、人類の始祖は誕生のときに生の恩恵を約束されるとともに、死の可能性を宣告されている。なぜなら、アダムという名はヘブル語の「人」を示し、「土」を示すアダマに由来しているからである。だから創世記3章19節の「汝は面に汗して食物を食い終に土に帰らん其は其中より汝は取れたればなり汝は塵なれば塵に皈るべきなりと」にあるように、人は生涯にわたって土を耕し、土に帰るという死を誕生の瞬間に孕んだのである。しかし、誕生に際して選択の自由意志を神から与えられているので禁断の本の実の掟にたいしては、遵守と違反のどちらをとることもできたはずである。「たのしみ」を表すエデンの園にあって、蛇との出会いが一つの事件であったのは、人間が楽園に作られた「善悪を知る木」の両義性を認識できなかったために、蛇の強大な悪によってイノセントな幼年時代を喪失し、楽園を追放され、贖罪の旅に向かわなければならなかったからである。後日、蛇は悪魔の象徴に発展し、ヨハネの黙示録では、天使ミカエルと戦って敗北する。

グリーンの『自伝』(*A Sort of Life,* 1971) には、作者の誕生以後の28年にわたる生と、67歳の作者の回想による再生との2重の時間が校長公舎を舞台にして交錯する。フロイトに刺激されたグリーンは『喜劇役者』(*The Comedians,* 1966) の中でブラウンを借りて「作家にとって一生のう

ちの初めの20年間が生涯全体の経験を含む、その他は観察だといつも言われているが、それは私たちみんなに等しく当てはまると思う」と語り、またジェームズ・バリー(James Barrie)は「2歳という年齢は終りの始まりだ」と言う。この点でグリーンが最初の生を経験した校長公舎内のラシャ張りのドアは、ピーター・ガヴニー(Peter Coveney)が言う、人間性回復の手段となる子どもの始原的イノセンスと、エディプス・コンプレックスや逃避感情に包まれた死を礼賛するためのシンボルとしての負のイノセンスとの両者がせめぎ合う死の国境であるということができる。

註

(1) Graham Greene, *The Third Man and the Fallen Idol* (London: Heinemann, 1950), p. 151.
(2) Gwenn R. Boardman, *Graham Greene* (Gainesville: University of Florida Press, 1971), p. 34.
(3) Graham Greene, *Twenty-One Stories* (London: Heinemann, 1954), p. 3.
(4) Barbara Greene, *Too Late to Turn Back* (London: Settle and Bendall, 1981), pp. 6-7.
(5) Graham Greene, *Ways of Escape* (London: Bodley Head, 1980), p. 46.
(6) Graham Greene, *Journey Without Maps* (London: William Heinemann & The Bodley Head, 1978), p. 32.
(7) *Ibid.*, p. 33.
(8) *Ibid.*, p. 51.
(9) *Ibid.*, p. 52.
(10) *Ibid.*, p. 60.
(11) *Ibid.*, p. 61.
(12) *Ibid.*, p. 66.
(13) *Ibid.*, p. 66-67.
(14) *Ibid.*, p. 67.
(15) *Ibid.*, p. 83.
(16) *Ibid.*, p. 83.
(17) *Ibid.*, p. 83.
(18) *Ibid.*, p. 84.
(19) *Ibid.*, p. 88.
(20) *Ibid.*, p. 118.
(21) *Ibid.*, p. 118.
(22) *Ibid.*, p. 119.
(23) *Ibid.*, p. 179.
(24) M. エリアーデ『生と再生』(堀一郎訳、東京大学出版会、1971), pp. 3-14.
(25) *Ibid.*, pp. 20-21.
(26) *Ibid.*, p. 29.
(27) *Ibid.*, pp. 152-153.
(28) Greene, *Twenty-One Stories*, pp. 1-2.
(29) Michael Tracey, *A Variety of Lives* (London: The Bodley Head, 1983), pp. 8-9.
(30) Graham Greene, *The Lawless Roads* (London Heinemann, 1955), pp. 3-4.
(31) *Ibid.*, p. 3.
(32) Marie-Françoise Allain, *The Other Man* (London: The Bodley Head, 1983), p. 41.
(33) 「戦争」ゲームの概要とこの詩の結末に起きる勝敗の可能性について上島建吉氏からご教示をいただいた。
(34) *Public School Verse 1921-1922 An Anthology* (London: Heinemann, 1923), p. 15.
(35) Allain, *The Other Man*, p. 41.
(36) Graham Greene, *A Sort of Life* (London: The Bodley Head, 1971), p. 72.
(37) Greene, *Journey Without Maps*, p. 25.
(38) *Ibid.*, p. 25.
(39) *Ibid.*, p. 8.
(40) Greene, *Twenty-One Stories*, p. 21.
(41) *Ibid.*, p. 34.
(42) *Ibid.*, p. 42.
(43) Greene, *Journey Without Maps*, p. 95.
(44) Greene, *A Sort of Life*, p. 12.
(45) Carl G. Jung, *Psychology and Religion* (New Haven and London: Yale University Press), p. 102.
(46) *Ibid.*, p. 63.